

京都産業大学 世界問題研究所 ニュースレター

2022. 9 Vol.6

NEWS LETTER

CONTENTS

特集

2021 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式
表彰式概要

2

所長挨拶

4

講評

5

若泉敬記念基金について

11



【特集】

2021 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

京都産業大学世界問題研究所主催の2021年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式が、2022年3月16日（水）にMicrosoft Teams を利用してオンラインで

開催されました。世界問題研究所の所員や関係者、懸賞論文の入賞者など19名が参加しました。

「若泉敬記念基金」懸賞論文は、長年にわたって世界問題研究所所長を務めた故若泉敬教授の寄付をもとに設置された「若

令和3年度 世界問題研究所 若泉敬記念基金懸賞論文 入選者

| 二 席 | |
|-------------------------|--|
| 今江 俊哉さん (外国語学部・4年次) | 「国際法における人道的干渉の位置づけ—コソボ空爆後までを中心に—」 |
| 瀧澤 美子さん (文化学部・4年次) | 「16世紀イタリアにおける宗教改革思想の伝播を担ったヴェネツィア出版人—アンドレア・アッリヴァーネの活動目的—」 |
| 佳 作 | |
| 岩田 浩昌さん (経済学部・2年次) | 「認識機能つき回収ボックスの利用で Eco 懸賞の参加へ—資源回収ボックスの正確な利用とインセンティブの確立—」 |
| 久保 公鶴さん (現代社会学部・4年次) | 「文化を越えた離乳食の在り方～インタビューからわかる伝統の変化と母たちの選択～」 |
| 寺尾 美咲さん (国際関係学部・3年次) | 「現代韓国に関する—考察—若者の就職難から見る韓国—」 |
| 福西あさひさん (国際関係学部・3年次) | 「『EU 復興基金（次世代 EU）の戦略的意義』—結束とプレゼンスの回復に向けて—」 |
| 森賀 優太さん (国際関係学部・3年次) | 「国際問題に対する解決策としてのエシカル消費—エシカル消費の普及へ向けた課題と展望—」 |
| 吉馴 真汐さん (国際関係学部・3年次) | 「持続可能性の再定義—『サステナブル』・サプライチェーンの構築にむけて—」 |

※一席の該当者なし

泉敬記念基金」の活動の一環として実施されています。本学の学生を対象に「今日の世界問題に関するテーマを各自で設定し、副題をつけて論じる」という趣旨で論文を募集したところ、本年度は文系全学部の2年次生から4年次生まで20篇の応募作があり、二席2篇・佳作6篇と過去最多の計8篇が入賞しました（一席は該当作なし）。

表彰式では世界問題研究所所員の耳野健二 現代社会学部教授が司会進行を務めるなか、所長の川合 全弘 法学部教授から所長挨拶と応募作全体に対する講評があり、「回数を重ねる毎に、着実に応募作の水準が上がってきました。とりわけ今回は、一次資料や実地調査に基づく堅実な方法論、先行研究を踏まえた自説の論理的構成、日本語表現の正確さなど、論文作成の要点において大いに進歩が見られます」といったお話がありました。また、募集の趣旨で示されている「世界問題」についてどのよ

うに考えることができるのか、複数の応募作を例に説明が行われました。

つづいて、二席の2篇について、所員の久保 秀雄 法学部准教授から、いずれも著者の専門性を存分に活かした本格的な研究であり、どのような点が高い評価を得たのか、詳しい講評がありました。また、佳作の6篇については、所員の中谷 真憲 法学部教授から、優れた点とさらなる研鑽を期待する点について、個別に講評が行われました。

講評の後には、入賞者一人一人から執筆時の苦労や今後の抱負などについて語ってもらいました。入賞者からは「すごく個人的な興味から始めて研究論文を完成させることができ、最後にこうした評価を頂けて大変光栄でとても嬉しい。」「インタビューやアンケートといった調査を行う際になかなか協力して頂ける企業が見つからなかったなかで、地域の事業者の皆様が積極的に



入賞者のみなさんと川合所長、来賓の鈴井教授、加藤准教授

協力して下さったのが非常にありがたかった。」「現在進行形のテーマだったので、執筆中に資料を集め直したりするのが大変だった。」「新しいテーマを取り上げたので、先行研究がなかなか見当たらず、ひとりの著者の外国語文献しか存在しなかった。ひとりの著者だけなので偏った見方をしていないか、注意する必要があった。」といった声などが、寄せられました。

最後に、来賓として参加した鈴木 清巳 国際関係学部教授から、「普段授業で担当している指導教員とは違う第三者から丁寧な講評を頂ける成果発表のチャンスがあるので、今後もずっと続けてほしい」とのコメントを頂きました。同じく、来賓として参加した 加藤 敦典 現代社会学部准教授から、「執筆にあたってアドバイスを下さった先生方や調査にご協力頂いた関係者の皆様に、御礼とともに入賞のご連絡をすることをお勧めします」とのコメントを頂きました。

所長挨拶

開会に際しまして、懸賞論文の趣旨について簡単に説明をし、ご挨拶に代えたいと思います。

この懸賞論文の趣旨の一つは、「今日の世界問題について」という幅広い主題を設けて広く皆さんに論文を募り、その優秀作に対して賞金を与えることによって、本学

学生の皆さんの学業増進の励みにしてもらうことです。

これに加えてもう一つ重要な趣旨があります。それは、「若泉敬記念基金」という名称が示すとおり、懸賞論文企画を通じて若泉先生の事績を記念すること、これです。今日、私が強調したいのは、こちらの方です。若泉先生は今から 56 年前の昭和 41 年(1966 年)に本学に教授として着任され、昭和 45 年 12 月から昭和 55 年 4 月までのおおよそ 10 年間にわたって世界問題研究所の第 2 代所長を務められました。平成 4 年(1992 年)に本学を退職される際に、先生は退職金の全額を本学に寄付されました。これが後に「若泉敬記念基金」となったわけですが、今年は、若泉先生ご退職の年から数えてちょうど 30 年目に当たります。「十年一昔」と言いますが、人の記憶は時とともに次第に薄れてまいります。しかし若泉先生の事績は本学関係者が決して忘れられてならないものである、この深い決意が「若泉敬記念基金」という名称に込められています。

若泉先生の事績は非常に広範囲に及びますが、私なりに言えば、次の二点に要約できます。

第一に若泉先生は、本学発展の大功労者のお一人であること、これです。本学創立者の荒木俊馬先生やその盟友の岩畔豪雄先生と並んで、若泉先生は、その功労に照らせば、本学にとって「建学の父 Founding Father」の一人と言ってよい方です。

第二に若泉先生は、広い視野と溢れる情

熱とを兼ね備えた真の愛国者であったこと、これです。周知のとおり、若泉先生は、当時の佐藤栄作首相の密命を受けて沖縄の祖国復帰のためにアメリカとの外交交渉に尽力されました。今年はそれからちょうど50年目になります。

沖縄返還から50年、若泉先生ご退職から30年の今年に、皆さんがこの懸賞論文に応募されたことも何かの縁である、と思います。今日を良ききっかけとして、皆さんが若泉敬先生の事績を想起し、それを励みとしてまた一段と力を込めて勉学に取り組んでゆかれますことを念願しまして、私の挨拶といたします。有難うございました。

世界問題研究所長 川合 全弘

講評

<全体講評>

この懸賞論文が始まって今年は19回目にあたります。合計で20篇の応募がありました。過去最多です。加えて、初めて文科系7学部全てから応募者が出ました。この行事が全学に定着しつつあることの証として、大変うれしく存じます。まずは積極的に応募して下さった20名の皆さん全員の熱意と努力に感謝したいと思います。有難うございました。

審査の結果、二席に2篇、佳作に6篇が選ばれました。これら8篇については、後ほど個別に講評があります。

初めに、残念ながら今回は入選しなかった12篇について、そのお名前と題をご紹介します。板坂梨央さん「カンボジアにおける内戦とジェノサイドによる知識人の喪失——知識人養成のあゆみと今後の展望」、藤井祐夢さん「自然科学を基礎付ける思想——イタリアの哲学者ヴィーコの場合」、橋本佳奈さん「教育と経済発展」、大矢一輝さん「中国による台湾統一における4つのケースの分析と有事発生時の台湾からの難民に対する日本政府の対応についての考察」、谷悠羽さん「『人類と動物の対等関係』の実現——アニマルウェルフェアの観点より」、小松千紘さん「Quadから見る日本の対中戦略」、笹尾明日香さん「気候変動による災害と適応策——街づくりの観点から」、黒崎聖さん「貧困からの脱却——ソーシャル・ビジネスの観点から成功要素の分析」、大塚初音さん「エシカル消費の普及——教育の観点から」、渡辺大智さん「性的逸脱省察とアンドロギュヌス欲求」、車田魁さん「ベトナム中部高原におけるコーヒー栽培の行方——ロブスタの可能性」、緋田愛莉さん「レジ袋購入率の実態調査——さらなるレジ袋非購入率促進の基盤となるために」、以上です。なぜこれら12篇をご紹介したかと言いますと、せめてお名前と題だけでも挙げることによって、入選しなかった方々の努力についても併せてこの場で称えたいと思ったからです。3年次生以下の方もたくさんいらっしゃいます。是非また来年度にも挑戦してください。

さて全体的な講評を申します。回数を重ねる毎に、着実に応募作の水準が上がってきました。とりわけ今回は、一次資料や実地調査に基づく堅実な方法論、先行研究を踏まえた自説の論理的構成、日本語表現の正確さなど、論文作成の要点において大いに進歩が見られます。今回入選した8篇はこれらの点で特に優れていることが評価されたものです。入選数8篇も過去最多です。

ここでは、皆さんのさらなる進歩の一助となることを願って、「世界問題」という当懸賞論文の主題の捉え方について、私の考えを簡単に述べたいと思います。

「世界問題」という主題は、一面において非常に幅広いものですので、言わば全ての問題がここに含まれます。何を論じても世界問題になります。研究所の初代所長を務められた岩畔豪雄先生は、「世界問題研究所」という名称を採用された際に、「さあ、

この名称なら森羅万象が研究できるぞ」と仰ったそうです。実際、今回の応募作でも、国際問題や環境問題から、社会問題や経済問題を経て、歴史や教育や心の問題に至る、非常に幅広い問題群が論じられています。さしあたりこの捉え方で良いと思います。ちなみにこの捉え方は、「世界問題」という主題を「世界の問題」と見るものです。

さて今後の参考のために指摘しておきたいことは、「世界問題」という主題が、「世界の問題」というにとどまらず、「世界という問題」という、より深い意味を含んでいる、ということです。言い換えれば、「世界問題」という主題には、世界に生ずる様々な問題を考察してみようという知的姿勢だけでなく、そもそも世界とは何なのかという、根源的な問題意識が孕まれています。人間はこの世界に生まれ落ち、その中で成長する過程において内心に自覚というもの



を育ててゆきます。この自覚の深まりに応じて、人間は繰り返し「世界とは何か」を問います。これが「世界問題」という主題の原形です。こう見れば、「世界問題」とは、理性によって対象化された世界の客観的認識の問題に尽きるものでなく、むしろ人間の自覚の深化と連動して繰り返し形成し直される世界像の問題であることが分かります。

私のような年寄りとは別として、まさに人格の形成期にある若い皆さんは、自分の内心を振り返れば、このような意味における世界問題を、たとえ素朴な形にせよ、日々実感しておられるのではないのでしょうか。今回の応募作の中で、私は、特に久保公鶴さんと渡辺大智さんの論文に、そのような世界問題意識の萌芽を感じました。「離乳食」をテーマとした久保さんの論文は、離乳食に「人としての在り方」を規定する原

初的要因、人が「生きていくうえでの原点」としての深い意味を見出そうとしています。また「性的逸脱」をテーマとした渡辺さんの論文は、あえて両性具有を解釈基準とする力業を通じて人間にとっての性愛一般の意味を掘り下げて考えようとしています。私はそれらの試みに、まさに世界を新たに生きようとする若い世代の瑞々しい感受性の発露を見る思いがしました。ちなみに、「世界問題」という主題が何を意味するかについて、私は以前に論文を書きました。詳しくはそれを参照していただければ幸いです（川合全弘「シンポジウム『世界における日本の文化——いま問われるべきものの本質』について」、『世界問題研究所紀要』第35巻、令和2年3月、217～239頁）。

最後に、来年度も、——できれば理系の3学部も含めて——多くの学生諸君から意



欲的な論文が寄せられますことを念願して、全体講評といたします。

世界問題研究所長 川合 全弘

<受賞作講評>

■二席

外国語学部国際関係学科 4 年次生

今江 俊哉

「国際法における人道的干渉の位置づけ—コソボ空爆後までを中心に—」

本稿は、ある国で発生している非人道的行為を阻止するために武力を用いて介入する人道的干渉について、国際法上どのように捉えるべきか、不干渉義務や国際人権法、武力行使禁止原則、集団安全保障、さらには違法性阻却事由としての緊急避難との関係から検討した論文である。著者は先行研究を踏まえつつ丁寧に検討を進めること

で、人道的干渉がコソボ空爆を契機に一部で肯定されるようになりつつあるものの、国際法上はやはり違法であると考えられると結論づけている。前年度に二席を獲得した論文と同様に、著者はすきのない堅実な論証を心がけていて、修士論文のレベルに届くかのような本格的な内容となっており大変見事である。

■二席

文化学部国際文化学科 4 年次生

瀧澤 美子

「16 世紀イタリアにおける宗教改革思想の伝播を担ったヴェネツィア出版人—アンドレア・アッリヴァーネの活動目的—」

本稿は、ローマ・カトリック教会によるプロテスタントへの思想統制が行われた 16 世紀のイタリアを舞台に、思想統制に抵抗して宗教改革推進派の書物を普及させ



た出版人がいったいいかなる目的をもって出版事業を行っていたのかを、出版物に記された献呈文を分析することで解き明かそうとした論文である。献呈文というイタリア語で書かれた一次史料を自ら読み解くことで、先行研究にはない独自の研究成果を生みだしており、歴史研究として相当に本格的な研究水準に達している。また、現代でも問題となる思想統制・言論統制という大きなテーマと関連付けた問題設定は、著者の視野の広さを感じさせ高く評価できる点である。

■佳作

経済学部経済学科 2 年次生

岩田 浩昌

「認識機能つき回収ボックスの利用で Eco 懸賞の参加へー資源回収ボックスの正確な利用とインセンティブの確立ー」

資源回収ボックスの利用者の増加法、正確な利用法について精緻な考察を加えた論考。今回提出されたものの中でも断トツに「実用的な」論文であった。論文の基本作法は堅実に押さえており、論旨の進め方はほぼこのままながしかの論集、たとえば企業内論文集などには掲載可能なレベルである。自身でフィールドワークも行い、統計的な分析もしっかりと施している。おもしろくは手堅すぎて大きな思考フレームワークの設定や発展性があまりうかがえなかった点である。学生論文としてはもう少しラフでも、こじんまりとまとまるよりは、これだけの力量をより大きく活かしてもら

いたかった感がある。ともあれ大変にレベルが高いことには感心した。

■佳作

現代社会学部現代社会学科 4 年次生

久保 公鶴

「文化を越えた離乳食の在り方～インタビューからわかる伝統の変化と母たちの選択～」

現代社会学部らしいフィールドワークをふまえた論考。日本と比較しつつベトナムの離乳食の変化、子育ての変化を追っている。こうしたテーマ設定での論考ははじめて読んだが、なかなか興味深く“読ませる”ものであった。変わりゆくベトナム社会を、この絞り込んだ視野から追ったものとしても珍しいのではないだろうか。ジャーナリズム的資質も感じさせる部分があった。他方で発展性については、最後がやや尻すぼみ気味であったが、これはフィールドワークの限界や文献の限界もあるのだろう。しかしモノグラフィーとしてずっとやり続けていけばやがて一つの大きな論文にまで育ちそうな好素材である。今後の継続が期待される。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次生

寺尾 美咲

「現代韓国に関する一考察ー若者の就職難から見る韓国ー」

ソフトパワーにおいて拡大を続ける韓国が、一方では「ヘル朝鮮」といわれるほど

若者にとって厳しく、不条理な社会となっているのはなぜか。この今日的テーマに、若者の就職難の角度から迫った論考である。全体に非常に手堅くまとめられ、押さえるべき公的データもしっかりと踏まえて書かれている。原因面および政府対策面も最新の状況を織り込んでおり、教科書的なレベルに達している。その意味ではかなりレベルは高い。おしむらくは反面、手堅すぎて独創性にはややかける点がある。水準の高い考察であることは変わりないため、今後はオリジナリティの構築にさらに取り組んでももらえたらと思う。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次生

福西 あさひ

「『EU 復興基金（次世代 EU）の戦略的意義—結束とプレゼンスの回復に向けて—」

コロナ禍の下で EU に設けられた「次世代 EU」なる復興基金の戦略的意義を検討した論考である。非常に今日的なテーマをあつかっていて著者の感度の高さがうかがえる。また EU のかかえる大きな問題（域内結束の乱れ）、欧州グリーンニューディール等の大枠をきちんと押さえた上で書かれており視野も広い。復興基金そのものは、新しい情報であるがゆえに関連文献も乏しいと思われるが、経緯説明を含めきちんと整理されており堅実である。それだけに、テーマを最後にもう一度膨らませることが難しかったのか、最後がややこじんまりとってしまったが、よく勉強していたことが

うかがえた。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次生

森賀 優太

「国際問題に対する解決策としてのエシカル消費 エシカル消費の普及へ向けた課題と展望」

エシカル消費の普及に向けた展望を探る論考。この論考もたいへん今日的である。逆に言えば流行のテーマであるだけに他との差別化が難しいところである。本論考の場合、どのような要因がエシカル消費の浸透・継続に寄与するのか、という大きなフレームワークの下で、自ら消費者意識調査や企業インタビューを実地しており、一定数の独自データを得て取り組んでいるところがまず素晴らしい。また各種の公的データもきちんと参照している。評者としてはこの企業インタビューの仕方（設問項目の設定）に工夫があることを高く評価している。数は 6 社と少ないのが惜しまれるが、よりデータをとっていけばかなり客観性とオリジナリティのある分析土台が得られるのではないだろうか。今後の発展に大いに期待している。

■佳作

国際関係学部国際関係学科 3 年次生

吉馴 真汐

「持続可能性の再定義—『サステイナブル』・サプライチェーンの構築にむけて—」

望ましいサステイナブル・サプライ

チェーン・マネジメント（SSCM）の在り方を問うた論考。よくあるサプライチェーン論ではなく、SSCMに切り込んだところは大変に時代感度が高い。書きぶりは論文としての作法を守っており、既存研究もきちんと踏まえている。またアプローチの整理も簡潔だが、既存論考を踏まえて手堅い。評者が感心したのはパタゴニアについての分析である。いうまでもなくサステイナブルな企業の代表であるが、巷間良くある絶賛で終わらせるのではなく、その限界まで指摘した論考というものはこれが初めてであった。発展性もあるがゆえに最後は遠慮を捨てて、より大きな展望を描いても良かったと思われる。しかし非常に良い論考であった。

以上

世界問題研究所長 川合 全弘

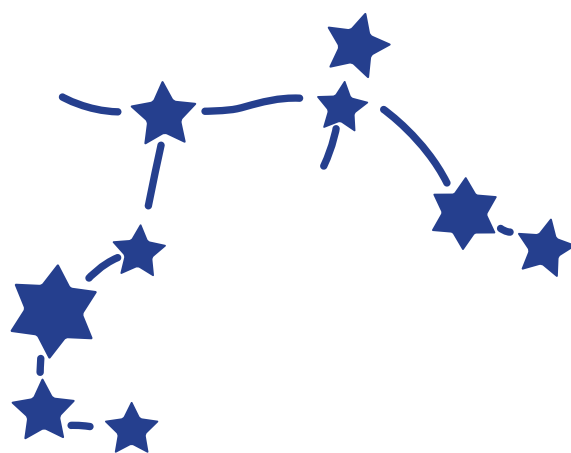
同研究所員 中谷 真憲

同研究所員 久保 秀雄

若泉敬記念基金について

若泉 敬（わかいずみ けい 1930-1996年） 国際政治学者。東京大学法学部、ロンドン大学院卒業。1965年に本学教授として招聘され、1966年世界問題研究所所員となり、1970年から1980年まで同研究所所長を務める。1992年退職時には退職金の全額を同研究所の活動資金として寄付、同研究所では2001年にこれを「若泉敬記念基金」と命名。若者の教育に熱心だった若泉教授の精神を学生に還元するため、講演会開催、懸賞論文募集などの経費に運用している。





京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第6号 2022年9月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所所員 久保 秀雄

印刷 中西印刷株式会社
